

『資本論』の分析・上昇法

松 石 勝 彦

一 下降分析による具体的なものから抽象的なものの抽象

本論文の課題は、とくに分析と上昇（下向と上向）に焦点をしぼり、マルクスの『資本論』の方法を明らかにすることにある。

マルクスは『経済学批判要綱』（以下Grと略記し、MEGA II 1.1とII 1.2と旧ドイツ版の原頁を付す）の序説の第三節において「経済学の方法」を説明する。その第二パラグラフでマルクスは次のようにいう。

引用①「現実的なものや具体的なものの、現実的な前提から、したがってたとえば経済学では、全社会的生産行為の基礎であり主体である人口から始めることが、正し

いことであるように見える。しかしこれは、もっとたいてい考察してみると、まちがいだとわかる。人口は、もし私が、たとえばそれを構成している諸階級を除外するなら、一つの抽象である。この諸階級も、もし私が諸階級の存立する基礎となっている諸要素を知っていなければ、これまた空語である。たとえば賃金労働、資本などである。賃金労働や資本は、交換、分業、価格などを想定している。たとえば資本は、賃金労働がなければ、価値、貨幣、価格などがなければ、無である。したがって、もし私が人口から始めるとしても、それは全体の混沌とした表象にすぎず、もっとたいてい規定をあたえることによって、私は分析的に、だんだんとより単純な諸概念を見いだすようになる。表象された具体的なもの

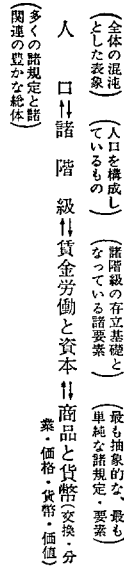
のから、だんだんとより稀薄な抽象的なものに進んでいて、ついには、最も単純な諸規定に到達してしまうであろう。そこからこんどは、ふたたび後方への旅が始められるべきであって、最後にふたたび人口に到達するであろう。だがこんどは、全体の混沌とした表象としての人口ではなく、多くの諸規定と諸関連の豊かな総体(Totalität)としての人口に到達するであろう。」(Gr三五一六、旧二二頁)

この引用文言は、経済学の方法、したがってまた『資本論』の方法、経済学の「篇別区分」(Gr四三、旧二八頁)を知る上で決定的に重要である。この文言からまず何よりも経済学の方法または『資本論』の方法とは、端的にいえば、分析・上昇法だということがわかる。第一に、具体的なものを分析してより抽象的なものを抽象し、さらにこのより抽象的なものを分析してもっとより抽象的なものを抽象し、このような分析による抽象を何度も何度もくり返して、最後に最も抽象的なものに達する。第二に、このような下降的分析を必然的な前提として、今度は抽象的なものからだんだんと具体的なものへ上昇してゆき、最後に分析の出発点である具体的なものを

「全体の混沌とした表象」から「多くの諸規定と諸関連の豊かな総体」にかえる。これは分析と上昇の方法である。

経済学の方法としては、生きた総体としての「現実的なものや具体的なものの」、たとえば「全社会的生産行為の基礎であり主体である人口」から始めるのは、一見正しくみえるが、しかし「まちがい」である。なぜなら、人口は「それを構成している諸階級」なしには「一つの抽象」だし、また諸階級もその「存立する基礎となっている諸要素」つまり「賃金労働と資本」なしには「空語」であるし、さらには「賃金労働と資本」も「交換、分業、価格」「価値、貨幣、価格」なしには「無」だからである。だから、人口から直接始めるという経済学の方法をとっても、人口は「全体の混沌とした表象」にすぎないから、それだけでは何もわからず、結局は「もったいない規定」を与えざるをえず、それで「分析的に」だんだんと「より単純な諸概念」をみつけたさざるをえない。つまり、「表象された具体的なものを」分析して、だんだんと「より稀薄な抽象的なもの」に下降し、この分析的下降をくり返しくり返しおし進め、ついには「最も単純な諸規定」に到達せざるをえない。

分析によってこのような現実的具体的なものからだんだんと抽象的なものに下降し、最後に最も抽象的なものに達するのはまさに「分析的」方法であり、分析そのものである。この「分析的」方法は引用①を図式化した次のシエーマにおいては下降矢印↓で示される。



つまり、まず「全体の混沌とした表象としての人口」ではあるが、感性的にそうだとわかる「全社会的生産行為の基礎であり主体である人口」を分析すれば、「それを構成している諸階級」が抽象できる。さらにこの「諸階級」を分析すれば、「諸階級の存立の基礎となつてゐる諸要素」つまりたとえば「賃金労働と資本」が抽象できる。さらにこの「賃金労働と資本」を分析すれば、それらの構成要素としての商品と貨幣つまり交換・分業・価格・貨幣・価値などが抽象できるのである。ここで「交換・分業、価格」、「価値、貨幣、価格」などは、『資本論』では第一部第一篇「商品と貨幣」として一括されうるも

のであり、資本の最も抽象的な諸範疇・諸要素である。

右シエーマは『資本論』の方法でもあり、それゆえ同時に『資本論』の構造をも示す。つまり、資本主義社会の三大階級の一般的経済分析の書である『資本論』⁽¹⁾は、基本的には(1)諸階級、(2)賃金労働と資本（それに土地所有）、(3)商品と貨幣の三つの環から成り立っているのである。『資本論』の最終章は第三部第五章「諸階級」であり、冒頭篇は第一部第一篇「商品と貨幣」であり、これらの出発点と終着点との間に賃金労働と資本の分析が入りこむ。冒頭篇の「商品と貨幣」は資本主義経済の最も抽象的で単純な要素としての商品経済を取り扱い、この商品経済を基礎・前提にしてその上に資本主義経済（資本と賃金労働）がそびえたつ。これが『資本論』の重層的展開構造である。(2)賃金労働と資本は実際にはそれ以外に土地所有を含むが、賃金労働と資本が資本主義の基本的な一般的な生産関係であつて、これに対して土地所有は特殊な生産関係である。だからマルクスも「たとえば、賃金労働と資本」といい、例示的にのべている。先のシエーマの(1)諸階級、(2)賃金労働と資本、(3)商品と貨幣という一国資本主義経済分析の篇別構成は、同じ

序説の最後にある「篇別区分(Einteilung)」(一)と(二)とは同じである。シェーマの(2)に土地所有を加えたものが、篇別区分の(二)の「ブルジョア社会の内的編制」である。シェーマの(1)の諸階級は篇別区分の終りの方の「三大社会階級」に相当する。

「篇別区分は、明らかに、次のようになされるべきである。すなわち、(一)一般的抽象的諸規定。それらはしたがって多かれ少なかれすべての社会諸形態に通じるが、それも以上に説明した意味で。(二)ブルジョア社会の内的編制をなし、また基本的諸階級がその上に存立している諸階級。資本、賃金労働、土地所有。それら相互の関連。都市と農村。三大社会階級。これら三階級のあいだの交換・流通。」

シェーマの(3)商品と貨幣は、篇別区分の「(一)一般的抽象的諸規定」である。この「(一)一般的抽象的諸規定」とは、引用①にある「交換、分業、価値」「価値、貨幣、価格」のことであり、また次のようなものである。

「分業、貨幣、価値などのようないくつかの規定的な抽象的一般的諸関連」(Gr 三六、旧二二頁)。

「最も単純な経済的範疇、たとえば交換価値」(同三六、

旧二二頁)。

「具体的な生きた全体の抽象的、一面的関連としての交換価値」(同三七、旧二二頁)。

「交換価値、流通、貨幣といった抽象的諸規定」(同二一七、旧二〇五頁)。

しかし見田石介氏はこの「(一)一般的抽象的諸規定」をむしろ「生産一般」だと理解されるが(『資本論の方法』六四頁、著作集④七五頁)、これは問題である。

分析とは、そもそもある対象をばらばらに分解して、その諸構成要素をとりだすことである。たとえば、水の分析というとき、水を分解して水素と酸素という要素(元素)をとりだすことである。だから、人口のばあいも、これを分析すれば、「それを構成している諸階級」(資本家階級、賃金労働者階級、土地所有者階級)を抽象することができる。さらに「諸階級」を分析すれば、「諸階級の存立の基礎となっている諸要素」つまり「たとえば賃金労働と資本」を抽象することができる。「賃金労働と資本」を分析すれば、交換、分業、価値、貨幣など、総じていえば商品と貨幣とを前提していることがわかる。賃金労働も資本も、もとをたせば、商品であ

り、貨幣である。まず資本主義社会では賃金労働は商品化し、商品として貨幣で売買される。だから賃金労働は商品や貨幣を前提する。商品や貨幣なくしては、賃金労働の概念は成立しない。資本もまた最終的に商品化され、売買され、利子率という価格がつくが、この点は別としても、資本の最も抽象的で最も単純な要素あるいは形態は商品であり、貨幣である。資本は、最初貨幣という形態Gで商品市場や労働力市場に登場し、商品生産に必要な生産要素つまり機械・原料(P_m)や労働力(A)に变身し($G \rightarrow W \wedge A$)、ついでこれにつづく生産過程: $P::$ でみずからさらに商品資本W'に变身し、最初の貨幣形態G'に復帰する。つまり、資本は $G \rightarrow W \wedge A$: $P:: W' \rightarrow G'$ なる運動をしており、資本自身が貨幣になったり、商品になったりするのである。だから、資本を分析すれば、資本の要素が商品や貨幣であることがわかる。

「商品と貨幣は、いずれも資本の最も要素的な定在様式、存在様式である。」(メガ、II_{3.1}、二八六頁)

「ブルジョア的富の要素的形態としての商品は、われわれの出発点、資本の発生のための前提であった。」

「商品と貨幣はどちらも資本の要素的前提であるが、

一定の諸条件のもとではじめて資本に発展する。」

「商品、一方では資本形成の前提として現れる……」

『諸結果』S.91: 訳一五二—三頁⁽²⁾。

このように、商品や貨幣は、資本の要素であるばかりでなく、「資本の発生」「資本形成」の前提であり、「一定の諸条件」すなわち、貨幣が $G \rightarrow W \rightarrow G'$ という流通形態をえがくとか、労働力が商品化しているとか、剰余価値を生産するとかという「一定の諸条件」のもとでは、はじめて「資本に発展する」のである。見田石介氏は「商品が資本へ発展するのではない」(『資本論の方法』九七頁、著作集④一〇七頁)といわれるが、そうではない。マルクス自身が「商品と貨幣は……一定の諸条件のもとで資本に発展する」といっているのである。逆に、商品と貨幣が資本に発展する「一定の諸条件」を分析によって資本から捨象してしまえば、資本は商品や貨幣に逆もどりしてしまう。資本を分析すれば、資本は商品と貨幣プラス価値増殖であることがわかるが、この資本が資本である最大の特徴・価値増殖を明らかにするためには、まずもって商品と貨幣を明らかにしなければならぬ。価値増殖は生産過程におけるインプットとアウトプ

ットの差、つまり労働力の価値とこの労働力が創造する価値との差であるからである。⁽³⁾

貨幣を分析すれば、商品を描象しうる。貨幣は商品が「一定の諸条件のもとで発展」したものであるからである。また貨幣は、「一定の諸条件のもとで資本に発展」し、資本に転化する。かくて、分析によって資本から貨幣が描象でき、この貨幣から商品が描象できる。だから、分析によって資本↓貨幣↓商品という具体的なものから描象的なものへの下降が可能になり、順序も決定できる。商品は貨幣も資本も捨象(描象)したものであり、それゆえ最も描象的なものである。ついで、貨幣は資本を捨象(描象)したものであり、それゆえ描象的なものである。資本は商品、貨幣とくらべて具体的なものである。この具体的な資本を分析して、資本を資本たらしめる価値増殖を捨象すると、より描象的な貨幣が描象でき、さらには貨幣を貨幣たらしめる諸規定を捨象すれば、商品を描象できる。

資本主義的生産は現実具体的には総過程として存在し、資本はこの総過程において総運動 $G \rightarrow W :: P :: W' \rightarrow G'$ をとげ、その中で、具体的諸形態をとる。この資本の総運

動を分析すれば、その一面として資本の流通過程を描象しうる。資本の流通も $G \rightarrow W :: P :: W' \rightarrow G'$ という循環の反復であるからである。しかしさらにこの資本の流通過程を分析してみれば、その背後に資本の生産過程 $P ::$ があることがわかり、これを描象しうる。資本の流通は資本の生産がなければ存在しない。かくて、分析によって三つの経済的形態と具体的な形態から描象的な形態への三者の下降順序、すなわち資本主義的生産の総過程↓資本の流通過程↓資本の生産過程の序列がきまる。資本の生産過程は、資本の流通過程や総過程を前提しなくとも考察しうるから、最も描象的なものである。資本の流通過程は一方では必ず資本の生産過程を前提にし、それからの上昇展開としてはじめてとけるから、より具体的なものであり、他方では総過程を捨象してもとけるから、総過程とくらべると描象的である。そして資本主義的生産の総過程は、両者の統一であり、最も具体的なものである。かくて、資本の三部構成が決定される。

資本主義社会の三大階級——資本家、賃金労働者、土地所有者——は、誰もががしっており、誰にでも感覚的にわかる現実的なもので具体的なものである。この三大階

級の経済的基礎は三大收入である。そこで、この具体的な三大收入を分析すれば、資本の利潤、地代、労働賃金の三者が抽象できる。そこで、具体的な地代を分析すれば、より抽象的な経済的諸形態を抽象しうる。地代の一形態である絶対地代は農業部門における価値と生産価格との差額としての超過利潤であり、差額地代は一般的生産価格と個別的生産価格との差額としての超過利潤であるから、そこでこれら二種類の超過利潤を分析すれば、生産価格、平均利潤、市場価値と個別的価値、競争などを抽象することができる。さらにこれらを分析すれば、その背後にある剰余価値を抽象しうる。かくて、三大収入↓地代↓利潤の平均利潤への転化↓剰余価値の利潤への転化がきまる。他方、資本の利潤を分析すれば、利子や商業利潤や平均利潤を抽象しうる。利子もまた資本の果実である。具体的な利子を分析すれば、産業利潤や商業利潤にその源泉をもつことがわかり、これらに帰着させる。商業利潤を分析すれば、産業資本の平均利潤からの分与であることがわかり、平均利潤を抽象しうる。かくて、利子↓商業利潤↓平均利潤という具体的なものから抽象的なものの順序がきまる。また利潤率の傾向的

低下法則が資本主義国を支配している具体的な現象であり、これを分析すれば、これは平均利潤率の低下であることがわかり、平均利潤率よりより具体的なものとして順序をきめることができる。このようにして、『資本論』第三部「資本主義的生産の総過程」における具体的なものから抽象的なものへと下降する下降順序すなわち、収入と諸源泉↓地代↓利子生み資本↓商業利潤↓利潤率の低下法則↓平均利潤↓利潤がきまる。

資本の流通過程を分析すれば、まず社会的総資本の再生産と流通が抽象しうる。この再生産はまさに生産過程と流通過程との統一であるからである。この再生産を分析すれば、再生産とは個別資本の回転のからみ合いであるから、その基底として資本の回転が抽象できる。資本の回転は資本の循環の反復であるから、これを分析すれば、資本の循環が抽象しうる。

「資本の循環が個別化された過程としてではなく、周期的な過程として規定されるとき、それは資本の回転と呼ばれる。」(KⅡ一五六―七頁)

「資本の回転とは、周期的（過程）として規定された資本の再生産過程のことである。」(KⅡ初稿、訳『資本

の流通過程』大月書店、一九八二年、九一頁)

かくて、資本の流通過程についての具体的なものから抽象的なものへの下降序列、すなわち再生産↓資本の回転↓資本の循環がきまる。

資本の生産過程は、具体的には再生産過程として存在し、蓄積過程でもある。この蓄積過程を分析すれば、相対的過剰人口は「労働の需要供給の法則」(KⅠ六六八頁)に依存し、したがってまた「労働賃金の一般的運動」(KⅠ六六六頁)に依存することがわかり、労働賃金が抽象しうる。そこで具体的な資本の蓄積過程↓労働賃金という具体的なものから抽象的なものへの下降順序がきまる。この労働賃金をさらに分析すれば、労働賃金とは労働力の価値または価格にすぎないものがすべての労働にたいして支払われた対価として現象したものにすぎないから、この背後に剰余価値生産があることがわかり、剰余価値生産を抽象しうる。この剰余価値生産を分析してみれば、絶対的剰余価値生産と相対的剰余価値生産の二つに分解しえ、後者を分析すれば、前者を基礎としていることがわかる。かくて、資本の生産過程内部における具体的なものから抽象的なものへの順序は、資本蓄積

過程↓労働賃金↓相対的剰余価値生産↓絶対的剰余価値生産となる。絶対的剰余価値を分析すれば、これはその消費が価値創造である労働力の購入が条件となっていることがわかり、単純流通における労働力の売買、したがってまた資本の一般的定式 $G - W - G'$ が抽象されうる。これをさらに分析すれば、単なる売買、 $G - W$ と $W - G$ に分解でき、単純流通、商品や貨幣を抽象しうる。かくて、前述のように、資本↓貨幣↓商品なる具体的なものから抽象的なものへの下降順序がきまる。

このようにして、具体的なものを分析して、より具体的でないものを抽象し、さらにこれを分析してもっと抽象的なものを抽象してゆき、このような分析による抽象あるいは下降的分析をだんだんとくり返して、最後に最も抽象的なものに達する。このような下降的分析によってのみ、経済的諸形態の具体的なものから抽象的なものへの下降序列がはじめて決定しうる。ただ分析のみが具体的なものから抽象的なものを導く。分析なくして、具体的なものから抽象的なものの抽象は不可能である。具体的なものから抽象的なものに達する方法は、分析そのものであり、「分析的」方法である。

いうまでもなく、具体的なものの分析によってえられた抽象的なものは、一般的なもの、一般性であり、本質的なもの、本質である。具体的な資本主義的生産の総過程から分析によって抽象された資本の生産過程は資本主義的生産の一般性であり、本質である。『資本論』第三部の最後の第七篇の三大収入の分析から抽象された剰余価値の利潤への転化、すなわち利潤は、資本主義的生産の総過程のいろいろな具体的形態の最も一般的なものであり、本質である。社会的総資本の再生産と流通から分析によって抽象された資本の循環は資本流通の一般的なもの、本質である。資本の蓄積過程から分析によって抽象された剰余価値生産は、資本の生産過程の一般的なもの、本質である。さらに剰余価値生産の分析によって抽象された単純商品生産は、資本の生産過程の一般性、本質である。

「商品生産は資本主義的生産の一般的形態である。」
(K II 四九〇頁)

ヘーゲルは『大論理学』で分析について次のようにいう。

「導きだされた思考諸規定が新たに分析されることが

でき、いまだ具体的であるかぎりでのみ、この分析は内在的進展をなすとみえる。この分析の最高のもの、最後のものは抽象的な最高の本質または抽象的な主観的同一性とこれに対する差異性である。だが、この進展は分析の本源的行为の繰り返しにほかならない。すなわちすでに抽象的な概念形式に取り入れられた具体的なものを再規定し、さらにその具体的なものの分析をし、つぎに分析から生じる抽象的なものを新たに具体的なものとして規定し、以下同様にして進んで行く。」(S. 504. 訳下三〇七頁)⁽⁴⁾

このように、分析は具体的なものから抽象的なものへと次から次へとだんだんと進み、「最後のもの」は「抽象的な最高の本質または抽象的な主観的同一性」すなわち「抽象的一般性」(同 S. 502. 訳三〇五頁)である。

ヘーゲルはまた『小論理学』で分析についていう。

「経験を作り出すために経験論が主に用いる形式は分析である。われわれは知覚のうちに、種々の具体的なものを持っており、その諸規定は、たまねぎの皮をはぐように、分解されねばならない。したがってこの分解は、合一されている諸規定を分解するだけで、分解という主

観の働き以外には、何もつけ加えないという意味である。しかしこの分析は知覚の直接性から思考への進展である。なぜなら、分析された対象に結合されて含まれている諸規定は、分離されることによって一般性の形式を持つからである。経験論が対象を分析する場合、もし対象がもとのままになっているという意味にとるならば、それは誤りであって、実際それは具体的なものを抽象的なものに転化するからである。」(S. 109—110. 訳上一六〇頁)⁽⁵⁾

このように、分析は、すでに知覚でわかっている具体的なものの「諸規定」を「たまねぎの皮をはぐように、分解する」ことであり、「知覚の直接性から思考への進展」であり、「一般性」の抽象であり、「具体的なもの」を抽象的なものに転化する「ことである」。

以上、分析による抽象をみたが、この意味では、分析は「抽象力」ともいえよう。マルクスは『資本論』第一部第一版序文でいう。

「経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学試薬も役に立たない。抽象力がこの両方の代わりをしなければならぬ。ところが、ブルジョア社会にとっては、労働生産物の商品形態または商品の価値形態が経済的細胞形態

なのである。」(K I—二頁)

このように、「経済的諸形態の分析」では顕微鏡や試薬も使えないから、「抽象力」を用いるほかない。これまで経済学が成功しなかった価値形態の分析も同様である。現実には目の前にあるのは、 $\text{I} \rightarrow \text{II} \rightarrow \text{III} \rightarrow \text{IV}$ という価値形態の「完成した姿」(同一一頁)すなわち貨幣形態(形態IV)である。われわれは、これを分析して右辺の金の代わりに銅がきても石炭がきても、あるいはリンネルがきても、一着の上衣の価値表現、価値形態、交換価値としては同じであることを発見する。かくて、形態IVを「抽象力」によって一般的価値形態(形態III)に還元する。しかし、さらに「抽象力」によってこの形態IIIも展開した価値形態(形態II)に還元しうる。なぜなら形態IIIは形態IIの逆関連的な裏返しにすぎないからである。最後に形態IIは「抽象力」によって単純な価値形態(形態I) $\text{I} \rightarrow \text{II} \rightarrow \text{III} \rightarrow \text{IV}$ に還元しうる。形態IIの一構成要素が形態Iであるからである。かくて、「抽象力」によってのみ「貨幣形態の生成(Genesis)」「貨幣の謎」(K I—六二頁)が明らかにしうる。このような抽象についてマルクスは次のようにいう。

「貨幣形態の概念における困難は、一般的等価形態の、したがって、一般的価値形態一般の、形態Ⅲの理解に限られる。形態Ⅲは、逆関係的に形態Ⅱ、展開された価値形態に解消し、そして、形態Ⅱの構成要素は、形態Ⅰ、すなわち20ポンドのリンネル＝1ポンドの上着、またはxポンドの商品A=yポンドの商品Bである。それゆえ、単純な商品形態は貨幣形態の萌芽である。」(KI八五頁)

このように、マルクスがはじめて「人間精神が二千年以上もまえからその解明に務めてきたが、むなしかつた」ところの「貨幣形態をその完成した姿とする価値形態」の解明に成功したのは、まさに「抽象力」のおかげであった。この「抽象力」は、前掲シェーマの下降矢印でもある。「抽象力」によって、入口↓諸階級↓賃金労働と資本↓商品と貨幣がいえるのである。かくて、分析⇐抽象、分析力⇐「抽象力」。

- (1) 拙著『資本論の基本性格』大月書店、一九八五年参照。
- (2) K. Marx, *Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses*, Archiv sozialistischer Literatur 17, Verlag Neue Kritik, Frankfurt. と国民文庫版の訳本のページ。以下同じ。

(3) 拙著『資本論研究』三嶺書房、一九八三年、三一五頁

参照。

- (4) G. W. H. Hegel, *Wissenschaft der Logik*, Suhrkamp Verlag, 1969, II. と武市健人訳下のページ。以下同じ。
- (5) G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*, 1830, Suhrkamp Verlag, 1970. と松村一人訳『小論理学』のページ。以下同じ。なお、文中の経験論はJ. Locke, *An Essay concerning human Understanding*, 1690 を指す。

二 下降分析と内的分析

前節末尾では、分析⇐抽象という側面をみたが、しかし、分析は完全に抽象とイコールではなく、より広い意味をもつ。二種類の分析が区別しうる。下降分析と即自的な内的分析である。

前節でみた分析は、具体的なものから抽象的なものを導きだす分析であり、抽象と同じ意味であった。この分析を下降分析、抽象分析とよぼう。先のシェーマあるいはこれまでの例解における下降矢印↓はこのような下降分析、抽象分析を意味する。これは具体的なものを分析して、この具体的なものから抽象的なものを抽出する分析、あるいは具体的なものを抽象的なものに還元する分

析である。

しかし、決定的に重要なことは、分析はこのような具體的なものから抽象的なものの抽象にとどまらず、もう一つの意味をもつということである。分析によって具體的なものから抽象的なものがえられ、経済的諸形態の序列がいったんきまってしまうと、次に抽象的なものから具體的なものへの上昇が始まるが、この上昇過程においてはもはや分析が全然行われずに、ただ一本道でどんどん上昇していくだけではなくて、上昇過程の各段階において、いったん上昇を中断して、各段階における「経済的諸形態の分析」(K I 二七頁)が徹底的に行われるのである。『資本論』第一部冒頭章では、上昇過程の第一段階においてすでに上昇をいったん中断して、商品に即して商品に内在して「商品の分析」(同 一一、四九、八五頁)が行われる。つまり「価値実体と価値量の分析」(同 一二頁)、「労働の二重性格の分析、価値形態の分析」(同 六四頁、初版 VII 頁)、商品の物神性の分析である。いったん、第一種類の下降的分析によって抽象された「分業、貨幣、価値など」のような「これらの個々の諸契機が多かれ少なかれ確定され、抽象されてしまう」と(後出

引用②)、こんどはこれらの「個々の諸契機」そのものに即した即自的な分析が行われるのである。このようにして、商品そのものについての即自的分析、内的分析が完了し、商品とは何か、つまり商品の概念が明らかにされると、はじめて次に貨幣に上昇しうる。そこで、こんどはこの上昇を貨幣でいったんしばらく中断して、貨幣に即して即自的に内的に貨幣の分析が完了して、はじめて次に「貨幣の資本への転化」に上昇しうる。そこでここでまた上昇過程をいったん中断して、しばらくこの転化に内在してそれを即自的に分析して、この転化とは貨幣が $G-W-G'$ をえがくことによってこの貨幣が資本に生成することであり、この資本の一般的定式が流通の諸法則(たとえば等価交換)と矛盾し、この矛盾はそれ自身価値創造である労働力商品が W に登場することによって解決されることなどを明らかにする。

このような単純流通における貨幣の資本への転化をそれに即して内的に分析し終えてこそ、次に労働力商品の現実の消費の場である資本の生産過程、さしあたり価値増殖過程Ⅱ絶対的剰余価値の生産に上昇しうる。そこでまた上昇をいったん中断して、しばらくはこの絶対的剰

余価値生産をそれに即して即目的に内在的に徹底して分析する。資本の生産過程を分析すれば、それはまずもって商品の使用価値をつくる労働過程であることがわかり、そこでこの労働過程を分析すれば、三要素（労働、労働手段、労働対象）から成り立っていることがわかる。さらに生産過程を分析すれば、価値形成過程、価値増殖過程という他の側面がわかり、ここから不変資本と可変資本の形態規定ができ、剰余価値率の概念が展開でき、労働日の限界の決定もできる。このようにして、絶対的剰余価値生産の分析をすっかりすませてから、次にこれからより具体的な相対的剰余価値生産に上昇しうる。こんどもまたここでいったん上昇過程を中断して、しばらくは相対的剰余価値生産に即して内在して内的分析を行い、その概念、三つの要素（協業、分業、機械制大工業）を明らかにする。そこでまた上昇過程にもどり、次により具体的な絶対的および相対的剰余価値の生産に上昇し、ここでまたいったん上昇を中断して、この問題に即して内在して内的即目的分析を行って、生産的労働と不生産的労働の剰余価値生産からする再規定、資本のもとへの形式的従属と実質的従属、剰余価値の自然的前提、ミル

剰余価値論批判、労働力の価格と剰余価値の量的変動、剰余価値率を表わす種々の式などを明らかにする。このようにして、絶対的および相対的剰余価値の生産の即目的的分析論が完了すると、ふたたび上昇過程にもどり、より具体的な労働賃金に上昇する。ここでまた上昇過程を暫定的に中断して、労働賃金すなわち労働の価格を分析して、それが労働力の価値の転化形態であり、時間賃金と出来高賃金という「二つの支配的な基本形態」（K I 五六五頁）をとることを明らかにし、最後に労働賃金の国際比較を試みる。こうして労働賃金の即目的な内的分析が完了すると、またふたたび上昇過程にかえり、より抽象的な労働賃金からより具体的な資本の蓄積過程に上昇する。ここでまたいったん上昇過程を中断して、蓄積過程に内在して即目的な内的な「蓄積過程の純粋な分析」（五九〇頁）を行う。この内的分析によって、蓄積過程は、単純再生産、剰余価値の資本への転化、資本主義的蓄積の一般的法則、いわゆる本源的蓄積の諸要素に分解され、説明される。

このようにして、資本の生産過程がすっかり分析されると、つぎに抽象的な資本の生産過程からより具体的な

資本の流通過程への上昇が始まる。この上昇はここで行った中断され、資本の流通過程に即して内的な分析が行われ、資本の循環、回転、再生産が明らかにされる。そのあと、このより抽象的な流通過程からより具体的な資本主義的生産の総過程へと上昇し、ここでまたそれに即して内在した内的分析が始まる。この内的分析は、剰余価値の利潤への転化、利潤の平均利潤への転化、利潤率の傾向的低下法則、商業資本と商業利潤、利子生み資本と信用制度、地代と土地所有、三大収入とその諸源泉などを明らかにする。

第一種類の分析は、具体的なものから抽象的なものを抽象する下降分析、抽象分析であった。ところが、第二種類の分析は、下降の逆である抽象的なものから具体的なものへの上昇過程における各抽象段階の経済的形態そのものに即した即目的分析、内的分析である。この即目的な内的分析はある経済的形態をより抽象的な形態にもはや還元しない。この点にこそ、内的分析の最大の特徴、特質がある。下降分析はある経済的形態をさらにより抽象的な形態に還元する。これに反して、即目的な内的分析は、もはやある経済的形態をより抽象的な経済形態に

還元せず、この形態そのものの運動とか機能とか、実体の分析である。この分析は第一節でみたような分析の対象となったより具体的な範疇をより抽象的な範疇へと導かない。抽象的な商品から貨幣への上昇途中での、上昇を中断したうえで貨幣の内的即目的な分析は、もはや具体的な貨幣を抽象的な商品に還元しない。内的分析は、下降分析と異なり、貨幣から商品を抽象しないで、貨幣に即して、貨幣の諸機能(価値尺度、流通手段、支払手段、貨幣蓄蔵、世界貨幣)を明らかにする。この意味では分析Ⅱ抽象ではない。また貨幣の資本への転化の内的分析はこの転化の内的構造、矛盾、その解決の萌芽の分析であり、けっして資本を貨幣に還元したり、資本からその要素としての貨幣を抽象したりはしない。絶対的剰余価値生産の内的分析も、その内的な仕組みそのものの分析であり、この生産を単純流通における剰余価値の発生つまり貨幣の資本への転化、資本の一般的定式に帰着させない。相対的剰余価値生産の内的分析も、これ自体の概念や諸要素の分析であっても、けっして相対的剰余価値生産を絶対的剰余価値生産に帰着させる下降分析とはならない。同様に絶対的および相対的剰余価値生産の

内的分析も、あくまでそれに即したその諸要素の分析であり、けっしてそれを抽象してより抽象的な相対的剰余価値生産につれもどさない。労働賃金の内的分析もまさにそのものに即したその本質、形態、国際比較の分析であって、それからより抽象的なものを抽象する下降分析と性質を異にする。資本の「蓄積過程の純粹な分析」もやはりそれに即して内在した分析であり、過剰人口や貧困を摘出しさえすれども、けっしてより抽象的な労働賃金への逆戻りとならない。

このように、同じ分析でありながら、一方の下降分析はある具体的な経済的形態を抽象的な経済的形態に還元する。たとえば、具体的な資本を抽象的な貨幣に還元し、さらにはこの貨幣を最も抽象的な商品に還元する。具体的な資本主義的生産の総過程を資本の流通過程に、さらには資本の生産過程に還元する。ところが、他方の内的分析は、抽象的なものから具体的なものへの上昇過程における各段階の経済的諸形態に内在し、それに即したその本質、概念、構造、機能、運動などの分析であり、それからより抽象的なものを抽象する下降分析と本質的に異なる。

このようにして、抽象的な経済的形態から具体的な経済的形態にだんだんと上昇しながら、その上昇過程を各段階で一時的にストップし、各経済的形態に即して即目的内的分析を行い、それが終了すると、また次のより具体的な経済的形態に上昇していく。これが『資本論』の方法の一大特色である。

もちろん、下降分析も内的分析も同じ分析である。だから、具体的なものから抽象的なものをうる下降分析において、同時に下降分析のみならず即目的内的分析をもまた全部すませてしまうことは可能である。

たとえば資本を分析して、資本を貨幣という資本の抽象的な要素に還元するばかりでなく、同時に貨幣を資本に転化する「一定の諸条件」すなわち価値増殖を分析してしまふことも可能である。上昇に先立つ具体的なものから抽象的なものを抽象する第一種類の下降分析を行うときに、同時に第二種類の経済的諸形態に即したそのものの即目的分析を行うことも可能である。しかも、ある程度このような二種類の分析を同時的に行うことは必要である。たとえば、具体的な資本を分析して抽象的な貨幣に下降しようとすれば、同時に資本を資本たらしめ

ている最小限の規定すなわち価値増殖を捨象しなければならぬ。そのためには、価値増殖とは何かがあらかじめ資本に即して内在的に分析されていなければならない。分析による抽象とは、あるものを抽出して、他のものを捨象することである。抽象とは抽出と捨象との同時的作用である。だから、分析による同時的な抽出と捨象を行わねばならない。資本を分析して、その要素である抽象的な貨幣の抽象は、同時的な価値増殖の捨象である。だから、下降分析と即目的な内的分析とはある程度同時に行わなければならない、内的分析なくして下降分析もありえない。

しかしこのことは二つのことを物語る。第一に、このように同時的な分析が行われるにしろ、内容的には下降分析と即目的な内的分析とが区別しうることである。分析の内容を考えてみると、ある具体的形態をさらにより抽象的なものに還元する下降分析とその形態そのものを成立させている固有の規定の分析を区別しうる。次節末で引用する文言によれば、「叙述の仕方」と「研究の仕方」とは形式的には異なるが、この「研究の仕方」のばあい、以上みた二種類の分析（下降分析と内的分析）を同

時にすませている可能性は大である。だから、研究が終れば、あとはただ叙述しさえすればよいのである。

しかし第二に、同時的な分析が行われるにしろ、さしあたりはまず、下降分析だけを完全に行い、下降序列またはその逆の上昇順序を完全に決定し、このために必要なぎりでのみ即目的な内的分析を行っておくことも可能である。このばあい、即目的な内的分析は、上昇過程で完全に行われる。貨幣そのものの諸規定の全面的な内的分析を行わなくとも、下降分析によって貨幣から商品の抽象を行うことは不可能ではない。しかしいずれにしても、その結果は同じである。現実には、下降分析にしろ、内的分析にしろ、試行錯誤である。下降が上昇過程で不十分だとわかり、さらにもう一つ抽象的なものが追加設定されるとか、内的分析でもう一つの抽象的なものへの下降が必要だとわかるとか、等々。結局は、結果において、二つの分析が完全になされて、経済的諸形態が十分に明らかにされれば、それでいいのである。

抽象的なものから具体的なものへの上昇は、この具体的なものの起源、発生、生成を明らかにすることである。たとえば、商品↓貨幣↓資本という上昇は、貨幣が商品

から発生し、資本が貨幣から発生したことを意味する。

だから、上昇により貨幣や資本の起源が明らかにされたことになり、このことで、貨幣とは何かつまり貨幣の概念、資本とは何かつまり資本の概念の約半分は明らかにされたことになる。ある具体的なものの起源、発生を抽象的なものから明らかにすることは、そのものの本質、概念の約半分を明らかにしたことになる。だから、上昇は発生的展開である。しかし、ある具体的なものの、たとえば、貨幣や資本は、その発生、起源を明らかにされただけでは、その全体概念が明らかにしたことはない。だから、下降分析の逆としての発生的展開以外に、そのものに即しての即自的な分析が必要になる。この内的分析までがすっかり下降分析段階ですまされているならば、上昇段階でそれを単に叙述するだけとなるうが、いずれにしても、ある具体的な形態の概念を明らかにするためには、発生的展開（下降分析の逆）と即自的な内的分析の両者が必要である。

以上みたように、二種類の分析を厳密に区別することが必要である。具体的なものから抽象的なものをうる下降分析と、抽象的なものから具体的なものへ上昇する諸

段階における経済的諸形態の即自的な内的分析は、概念的に明確に異なる。このような区別が明確でなかったために、これまで『資本論』の方法について無用の混乱が生じた。ローゼンタールや見田石介氏は、『資本論』の方法を「分析と上昇」にしないで、「分析と総合」とされるが、しかし事実上、総合を無視してしまい、分析的方法に一元化してしまい、上昇もまた事実上無意味にしてしまわれる。これは分析の二つの意味を不明確にしたままで分析を強調したためである。

三 抽象的なものから具体的なものへの上昇

以上みたように、分析によって現実具体的なものから最も抽象的なものに達したならば、そこからこんどは、ふたたび「後方への旅」が始まる。先のシェーマの上昇矢印↑が示すように、今度は出発点が最も抽象的な「商品と貨幣」であり、そこから「賃金労働と資本」に上昇し、さらには「諸階級」に上昇し、最後にふたたび人口に到達する。しかしこんどは、最初の現実の出発点をなした「全体の混沌とした表象としての人口」は、「多くの諸規定と諸関連の豊かな総体としての人口」に変えら

れる。つまり、人口の表象が概念に変えられるのである。

第一に、このような抽象的なものから具体的なものへの上昇は、先のシェーマからわかるように、ちょうど分析による抽象、下降的分析の逆である。分析によって具体的なものから抽象的なものが抽象されたからこそ、こ

んどは逆に抽象的なものから具体的なものにだんだんと上昇していけるのである。上昇に先立つ下降的分析または抽象分析、分析による抽象なくしては、上昇はありえない。具体的なものの分析が、それを構成する抽象的な諸要素の抽象を可能にする。たとえば諸階級を分析して、はじめて「諸階級の存立する基礎となっている諸要素」すなわち「たとえば賃金労働と資本」を抽象できる。賃金労働と資本を分析して、はじめてそれらのより抽象的な構成要素である商品と貨幣を抽象できる。このように、分析は、ある具体的な経済的形態または範疇を分解して、それより抽象的な経済的形態または範疇を得る操作、作業である。このような具体的なものから抽象的なものを導く下降的分析、抽象分析を「必然的な前提」(剰Ⅲ一四九九、全集四九一頁)として、はじめて抽象的なものから具体的なものへの上昇が可能になる。分析なくして上

昇はありえない。引用①でも、一見、上昇のみが強調されているようではあるが、よくよむとそうではなく、前掲シェーマのように、上昇に先立つ分析がちゃんとなされており、分析を「必然的な前提」とした上昇が正しいとされているにすぎない。

第二に、このような「後方への旅」すなわち「抽象的なものから具体的なものへと上昇する方法」(Gr 三六、旧二二頁)こそ、経済学の方法としては「科学的に正しい方法」(引用②)である。人口のような、「現実的なものや具体的なもの」から抽象的なものに下降する分析的方法は経済学の方法としては「まちがい」(引用①)であり、上昇法(上向法)のみが唯一正しい。しかし、なぜ『資本論』の方法として上昇法だけが正しいのか。ただ上昇法によってのみ、経済的諸形態とは何か、すなわちその概念がはじめて完全に明らかにされうるからである。下降分析だけでは、経済的諸形態の概念をうるには不十分である。前掲シェーマのように、賃金労働と資本を分析して、その基礎に要素としての商品と貨幣とがあるということを明らかにしたとしても、これだけでは賃金労働と資本の概念は完全に明らかにしたことにならない。

まず第一に、商品や貨幣から上昇して、それらの「発展」(前出)として資本や賃金労働をとらえなくてはならない。つまり、まず抽象的なものから具体的なものへ上昇して、この具体的なものの起源や発生を明らかにする必要がある。発生的展開が必要なのである。

われわれは、まず資本の最も抽象的一般的前提であり、しかもそれ自身最も抽象的な要素でもある商品进行分析して、商品とは何か、つまり商品概念を明らかにする。この最も抽象的な商品からより具体的な貨幣に上昇する。この上昇によって、貨幣の発生が明らかになる。

一方では、最も抽象的な商品の分析から価値概念がえられ、諸商品の価値関係の展開から価値形態の展開ができ、その結果より具体的なものである「貨幣形態の発生(Genesis)」(KI六二頁)が明らかにになる。他方、商品の分析から商品は使用価値と価値との統一であり、矛盾であることがわかるが、この矛盾は交換過程における全面的交換の困難を媒介にして、自ら展開して、商品と貨幣との外的対立を生み出す。このように、最も抽象的な商品から上昇してこそ、はじめて具体的な貨幣の発生が明らかになる。そこで、こんどは貨幣を固定して、貨幣

に即して貨幣の運動、諸機能を即自的に分析する。かくて、貨幣とは何か、貨幣概念がすべて明らかにになる。

しかし、貨幣は、現実には貨幣としての貨幣以外に流通形態 $G-W-G'$ をえがき、資本としての貨幣の役割を演じ、たえず資本に生成、転化している。だから、まず資本を貨幣からの転化すなわち上昇、発展、発生としてとき、資本の最初概念をうる。そしてついでここで上昇をいったんストップし、この転化に即して徹底的に即自的分析をする。その結果、貨幣を資本に転化させる貨幣の運動 $G-W-G'$ が産業資本、商業資本、利子生み資本などに共通な資本の一般的定式であること、その定式においては資本は流通から発生しているのに、流通の諸法則(たとえば等価交換)からすれば、流通から発生しえないという矛盾があること、この矛盾はその消費が価値創造である労働力商品が W に入りこむことによって解決されることなどが明らかにになる。

このように、ある経済的形態はまず何よりもそれよりか抽象的な形態からの上昇としてしか明らかにされえない。まず最初に、ある経済的形態の由来、起源を明らかにしなければならぬのである。一つ前のより抽象的な

範疇から上昇してそれを基礎、前提としてこそ、はじめて次の具体的な範疇が明らかにされうる。最も抽象的な商品から一足とびに具体的な資本を明らかにすることもできないし、逆に具体的な資本から商品を明らかにすることもできない。最も抽象的な商品から抽象的な貨幣に上昇し、さらにこの貨幣から具体的な資本に上昇するという段階的上昇をなしてこそ、貨幣・資本の経済的範疇は正しく解明できる。最も抽象的な資本の生産過程→抽象的な流通過程→具体的な総過程と上昇してこそ、流通過程や総過程がはじめて説明できる。平均利潤の底に剰余価値があることを分析でしても、平均利潤の概念は十分にとらえられない。資本の生産過程での剰余価値を生産するとき、資本の流通過程での剰余価値実現するとき、固定資本と流動資本に上昇し、最後には総過程での剰余価値の利潤への転化に上昇し、そしてこの利潤の平均利潤への転化に上昇してこそ、平均利潤は十分にときうるのである。商業利潤はこの産業資本の平均利潤からの上昇としてはじめてとけ、利子生み資本は産業資本や商業資本の平均利潤を生む運動からの上昇としてはじめてとけ、地代は以上の総運動からの上昇としてはじめてとけ、三

大収入とその源泉すなわち三大階級はこれらからの上昇としての総括としてはじめてとける。

問題の核心は、下降的分析あるいは分析による抽象だけでは不十分であり、抽象的なものから具体的なものの継起的、段階的上昇としてはじめて経済的諸形態の分析が可能になるということである。この上昇は、つまり発展、展開であり、発生的展開である。

ヘーゲルは『大論理学』で、分析的認識 (Erkennen) が「他者への移行、異なるものの結合」(S. 503. 訳下三〇五頁)を含まず、また「次々と中間項を通過して先に進んでいくものではない」(S. 504. 訳三〇六頁)とし、また「全体と部分、原因と結果」というような「相関関係」を本来の職分としな(S. 505. 訳三〇七頁)とのべ、分析的認識の限界を指摘している。分析的認識は「全推論の第一前提」にすぎず、単に「存在するもの」の把握 (Aufassung) にすぎず、他方総合的認識は「存在するもの」の (概念的) 把握 (das Begreifen) すなわち諸規定の多様性の統一における把握 (S. 511. 訳三一四頁)であり、「推論の第二前提」であって、「必然性」「差異性」「相関関係」を問題にするものだという。総合には、

後述のように、問題が残るが、しかし分析の限界の指摘だけは正しい。

このように、抽象的なものから具体的なものへ上昇する方法のみが経済的諸形態を把握する唯一の科学的に正しい方法である。たとえば、スミスは剰余価値の発見にかなり成功したが、この抽象的な剰余価値の即的分析のときにすでに平均利潤という具体的なものを同時に持ちこみ、それゆえ混乱をひきおこす。

「職人たちが原料に付加する価値は、このばあい二つの部分に分解され、その一つは職人の賃金を支払い、他は彼らの雇主が前貸した原料と賃金の全資財ストックに対する利潤を支払う。……雇主は彼の利潤が彼の資財の大きさに對してある比例をもちえないかぎり、小資財より大資財を用いるのに何の興味ももちえないであろう。」(『国富論』、キャンン版五〇頁)

ここでは利潤の源泉が職人の剰余労働にあることが正しく把握されているが、しかしこの把握もいきなり「原料と賃金の全資財に対する利潤」、「資財の大きさに對してある比例をも」つ利潤すなわち平均利潤が持ち込まれているために、完全にはならず、不十分に終わっている。

この抽象段階では平均利潤を抽象して、抽象的な剰余価値として把握し、これが完了したあと、前述のような抽象的なものから具体的なものへ上昇していく数多くの中間項、媒介項を一つずつだんだんに昇っていき、総過程の段階でようやく平均利潤を把握すべきである。これら中間項、媒介項こそ抽象的なものから具体的なものへの漸次的、段階的上昇を示す。抽象的なものと具体的なものを同時にとくのは、科学的に正しくない。抽象的なものから具体的なものへ段階的に一段ずつ上昇する方法によってのみ、経済的諸範疇の分析がはじめて可能になる。

リカードは、スミスの投下労働価値説を徹底させ、精密に仕上げようとしたが、このリカードですら、『経済と課税の原理』の第一章の価値論において、冒頭いきなり「際限なき競争」(スラッフ版、一二頁)を持ちこんだり、またいきなり固定資本と流動資本割合の相違や回転期間の相違のような平均利潤の規定要因を持ちこんだりして、価値法則の修正をとく。しかしこの修正は明らかに抽象的な価値法則から剰余価値論・回転論・固定資本流動資本規定などより具体的な多くの中間項、媒介

項を経てはじめて説明できるものである。「抽象的なものから具体的なものへ上昇する方法」をとらないかぎり、混乱がおこり、修正や具体的なものも説明できなくなる。

「リカードの誤りは、まさに彼が価値について論じている第一章で、これから展開すべきありとあらゆる諸範疇を与えられたものとして前提し、これらの範疇が価値法則と適合することを説明しようとしたことです。」(一八六八年七月一日クーゲルマンへの手紙)

マルクス以前の経済学者は価値と生産価格、剰余価値と平均利潤の説明に失敗したが、その理由は抽象的なものと具体的なものとを区別せず、具体的なものを抽象的なものからの段階的上昇によって把握しなかったことである。つまり抽象が不十分だったのである。彼らが「具体的なものを抽象的なものに直接に従属させ直接に適合させ」(剰Ⅲ一二七九、全集八六頁) ようとした点に経済学の方法上の誤りがある。

マルクスは『要綱』序説で引用①に直接つづけて次のようにいう。

引用②「第一の道は、経済学がその成立のころに歴史的にとってきた道である。たとえば一七世紀の経済学者

たちはいつも、生きた全体である人口、国民、国家、いくつもの国家などから始めている。しかし彼らはいつもの分析によって、分業、貨幣、価値などのような、いくつかの規定的な抽象的一般の諸関連を見つけたことで終わっている。これらの個々の諸契機が多かれ少なかれ確定され抽象されてしまうと、労働、分業、欲求、交換価値のような単純なものから、国家、諸国民の交換、そして世界市場にまで上昇していく経済学の諸体系が始まった。このあとの方が、明らかに科学的に正しい方法である。具体的なものは、それが多くの諸規定の総括であり、したがって多様なものの統一であるからこそ、具体的である。それゆえ具体的なものは、それが現実の出発点であり、したがってまた直観と表象との出発点であるにもかかわらず、思考においては総括の過程として、結果として現れるのであって、出発点としては現れない。第一の道では、完全な表象が蒸発させられて抽象的規定となったのだが、第二の道では、抽象的諸規定が思考の道を経て具体的なものの再生産に導く。」(Gr 三六、二一一頁)

前述のシェーマの下降矢印↓は一七世紀の経済学がと

った「第一の道」であり、「生きた全体である人口、国民、国家」等から始めて、「分析」によって、「分業、貨幣、価値などのようないくつかの規定的な抽象的⁽¹⁾な諸関連」を見つけて終わる。たとえば、ジョン・ロックは『利子・貨幣論』（一六九二年）において「生きた全体である人口、国民、国家」等から始め、「分析」によって「分業、貨幣、価値などのようないくつかの規定的な抽象的な一般的な諸関連」を見つけた⁽¹⁾して、終わった。

一八世紀になると、J・スチュアートは『経済学原理』（一七六七年）を「人口」から始めて、やはり分業、価値、貨幣等を論じた（同書第二篇）。しかし、これらの「個々の諸契機がいったん確定」され「抽象」されてしまうと、「労働、分業、欲求、交換価値のような単純なものから、国家、諸国民の交換、世界市場にまで上昇（aufsteigen）していく経済学の諸体系が始まった」のである。マルクスはこのような「第二の道」つまり「上昇」法が「科学的に正しい方法」だという。これは先の引用文中で「第一の道」が「まちがい」だというのにちやうど照応する。この「第二の道」＝上昇法によれば、まさに具体的なものは「多くの諸規定の総括」、「多様な

ものの統一」として思考において再生産される。具体的なものは「現実の出発点」、「直観と表象との出発点」であるが、思考においては「総括の過程、結果」として現れるにすぎず、出発点ではありえない。「第一の道」では「表象が蒸発せられて抽象的規定」となり、「第二の道」では「抽象的諸規定が思考の道をへて具体的なものの再生産に導く」のである。たしかに、抽象から具体への上昇法が「科学的に正しい方法」であると明言されているが、しかし、ここでも「具体的なものは：現実の出発点であり、したがってまた直観と表象との出発点」であって、この完全な表象を「蒸発」して抽象的規定とする方法、つまり、下降的「分析」または「蒸発」の方法が上昇法の必然的な前提とされていることは明らかである。「分析」によって具体的なものから抽象的なものを「蒸発」することなくして、抽象的なものから具体的なものへの「上昇」はありえない。叙述の方法としては、「上昇」法が「科学的に正しい方法」だとしても、この「上昇」の必然的な前提はあくまでも、「分析」にある。それゆえマルクスの経済学の方法は、一言でいえば、分析を必然的な前提とした上昇法、分析・上昇法である。

(1) John Locke, *Several Papers relating to Money, Interest and Trade*, &c., 1696, rep. by Kelley, 1968. 田中正司、竹本洋訳『利子・貨幣論』東大出版会、一九七八年。なお、ロック経済論については種瀬茂『経済思想』青木書店、一九八六年、第一編参照。

四 研究の仕方と叙述の仕方

以上みた具体的なものから抽象的なものを導く分析は「研究の仕方」とかかわり、上昇は「叙述の仕方」とかわる。マルクスは『資本論』第一部第二版「あとがき」で次のようにいう。

「もちろん、叙述の仕方は、形式上研究の仕方とは区別されなければならない。研究は、素材を細部にわたってわがものとし、素材のいろいろな発展形態を分析し、これらの発展形態の内的な結びつき(Band)を探りださなければならぬ。この仕事をすっかりすませてから、はじめて現実の運動を照応的に叙述することができる。これがうまくいって素材の生命が観念的に反映することになれば、まるで先験的な(a priori)構成とかかわりあっているかのように見えるかもしれない。」(K I二七頁)

みられるように、まず最初に「叙述の仕方」と「研究の仕方」とが「形式的に」区別されている。研究は、素材を細部にわたってわがものとするのは当然であるが、注目すべきは、研究がすでに「素材のいろいろな発展形態を分析し、これらの発展形態の内的な結びつき(紐帯)を探りだ」す点である。すでに研究において、素材が分析によって単に構成要素に分解されるだけではなくて、素材の「いろいろな発展形態」が分析され、しかもそれらの「内的な結びつき」までが探求されるのである。「素材のいろいろな発展形態」とは、たとえば、商品↓貨幣↓資本、資本の生産過程↓流通過程↓総過程、剰余価値↓利潤、価値↓生産価格、剰余価値の分解諸形態(平均利潤、商業利潤、利子、地代など)等々である。「これらの発展形態の内的な結びつき」とは、これら諸範疇相互間の内的関連を意味し、事実上『資本論』の篇別構成を意味する。だから、すでに「研究の仕方」において、商品↓貨幣↓資本の展開、資本の生産過程↓流通過程↓総過程の展開、剰余価値の利潤への転化、価値の生産価格への転化、剰余価値の各種源泉形態への分解などが「探り出される」ことになる。この仕事をすっかりすま

せてから、はじめて「現実の運動を対応的に (entsprechend) 叙述」しうるにすぎない。だから、あくまで「叙述の仕方」は、それに先立つ研究を必然的な前提とし、研究によって解明された素材の「いろいろな発展形態」や「これらの発展形態の内的な結びつき」をあとからたどっていくにすぎず、これが「抽象的なものから具体的なものへ上昇する方法」となる。ここでは、研究は分析を含み、分析より高次の概念である。研究は分析によっていろいろな「発展形態」やそれらの「内的な結びつき」をみつけたのである。だから、このばあい、研究は単に具体的なものから抽象的なものへの下降的分析以上のものを意味する。研究は、「素材を細部にわたってわがものとし」、さらには「発展諸形態を分析」するのだから、前述の経済的諸形態に即しての即自的分析も含むと思われる。研究はそういうものであり、だから叙述はこの研

究成果の単なる叙述であり、上昇過程での即自的分析を含まず、研究でつまされた即自的分析を述べるだけに終わる。⁽¹⁾

右マルクスの文言は『資本論』の方法または経済学の方法の一般論である。ところが、見田石介氏は右文言を単に「価値形態の展開をさしたものと思われる」(『資本論の方法』四〇頁、④五四頁)といわれる。これは右文言がのべられている前後の文脈からして単純な誤解である。

(1) このあと分析的方法と発生的方法、論理的展開、弁証法的展開、ローゼンタールと見田石介氏の「分析と総合」説の検討などを予定していたが、紙数の都合上省略した。拙著『資本論の方法』近刊予定を参照されたい。

(一橋大学教授)